

東京都青梅市成木地区における石灰焼き

角 田 清 美*

1. はじめに

慶長11（1606）年11月、老中の 大 相模守（大久保忠隣）と 本 佐渡守（本多正信）から、八王子代官頭の大久保石見守長安へ、以下のような書状が届いた^{注1}。

今度江戸御城御作事御用白土 武州上 / 成木村・北小曾木村山根より取寄候
／ 御急之事に候間 其方御代官所三田領 / 加治領、御領、私領、道中筋ヨリ助
馬出_レ之 無 / 滞石灰附送候可_二申付_一 駄賃口附 服 / 忌有_レ之者 堅出し不_レ申
候様可_二申付_一候 / 以上 / 午十一月 大 相模守 / 本 佐渡守 / 大久保石見守
殿

大久保長安は、支配下の青梅陣屋の役人を経て、上^{かみなり}成木村と北小曾^{きたおそ}木村^きの石灰焼きの窯主たちへ、すぐに次のような命令を発した。

如_レ斯御用白土に仰付候間 大切に致_二吟 / 味_二道中伝馬無_レ滞様 附送可_レ申候
服忌 / 者堅不_レ出様可_二可申付_一候 以上 / 午十一月 / 大 石見守 / 高麗郡
上成木村白土焼 / 多摩郡北小曾木村白土焼

* 専修大学文学部兼任講師

この年の3月1日から、本多正信を工事の総奉行とし、幕府は江戸城の大規模な増改築に取り掛かり、半年後の9月、本丸が完成した^{注2}。上記の書状は、完成した城郭を、天下を支配する將軍の居城に相応しい白亜の城郭^{注3}にするため、漆喰壁の資材である石灰の納入を、上成木村と北小曾木村の石灰焼きの窯主たちへ命じたと伝えられる。

このことがあってから以降、成木地区^{注4}および北側に隣接する直竹川流域の飯能市間野地区では、明治35（1902）年頃までの約290年間、漆喰壁の資材である石灰が大量に生産され、成木往還を通して各地へ運び出された^{注5}。

本報では、青梅市成木地区における、石灰を生産した窯跡^{注6}の分布と形状、石灰の生産工程、および成木地区への石灰焼成技術の伝播を中心に、成木地区における石灰焼きの盛衰について報告する。

なお本論は、筆者の「わが国における石灰工業史に関する研究」に関する、一連の研究（角田，1989；1995；1996；2011；2012；2017）の一部である。

2. 石灰窯の分布と立地条件

成木地区は青梅市の北部に位置し、黒山（標高842.3m）を源流とする成木川流域、および北側の直竹川流域である（図1）。流域の地質は、小沢峠から南東方向の榎峠^{えのきとうげ}へ向かう名栗断層を境とし、西側の高水山層^{たかみずさん}（中生代ジュラ紀）と、東側の雷電山層・成木層^{らいでんやま なりき}（中生代ジュラ紀）^{注7}に分けられ（小澤ほか，1985；酒井，1987；羽鳥ほか，1994；羽鳥ほか，1996；植木ほか，2007），これらの地層の走向は全体として北西—南東方向である。岩相は主として砂岩であるが、層内にはチャートや石灰岩がレンズ状に挟まれている。石灰岩は著しく純度が高く^{注8}（表－1），石灰の原料として採掘された。

表－１ 成木地区で産出する石灰岩の純度

| 産 地 | 焼成前の重量(g) | 焼成後の重量(g) | Ca(OH) ₂ の割合(%) |
|--------|-----------|-----------|----------------------------|
| 上成木久道 | 475 | 268 | 56 |
| 北小曾木白岩 | 275 | 155 | 56 |
| 間野黒指 | 277 | 157 | 56 |
| 滋賀県醒ヶ井 | 145 | 82 | 56 |

石灰を焼成した石灰窯は本窯^{ほんかま}あるいは本山窯^{ほんざんかま}と称され、成木川に沿って22か所、支流の北小曾木川に沿って15か所、直竹川に沿って8か所、そして多摩川の支流である平溝川に沿って1か所、計46か所が残っている^{注9}。石灰の焼成には、大量の水を必要とするため、窯はすべて小さな沢が、上記の河川に合流する付近に位置している。

原料の石灰石は石灰岩の露出地点で採掘され、採掘地は「ホンマ」と称されていた。ホンマと本窯はセットになっており、多くの場合、ホンマと本窯の距離は100～500m程度である。しかし、二本竹川^{に ほ たけかわ}に沿う2か所（かさむかいの窯・西村の窯）とその南方にある大西の窯は、直竹川流域^{まさきざわ}の正木沢上流にあるホンマから石灰石が供給されており、ホンマから最も遠い大西の窯まで約2.7kmも離れている。二本竹川流域^{に ほ たけかわ}にホンマはないが、3か所の窯へ石灰石を供給するため、正木沢流域^{まさきざわ}は稜線の北側であるにもかかわらず、正木沢の上流は東京都に含まれている。

次に、本窯の位置と付近の状況が、典型的な場所を記載する。

なお、成木地区で産出された消石灰の流通などについての詳細は、東京都立大学人文学部歴史研究室成木村調査団（1959）や川勝（2007）などが詳細に述べているので、ここでは触れない。

2－1. 所^{ところ}久保^{くぼ}の平次郎窯跡

慶長11（1606）年に石灰焼きを行った一人の、木崎平次郎が所有したと伝えられる窯跡で、慈願院^{じげんいん}の墓地には平次郎の墓と伝えられる、寛文2



図1 青梅市成木地区における
細線は等高線で、主曲線は100m間隔。波線は主な

窯跡の端から南西方へ約15m離れた付近には、飛散している消石灰粒が周囲より多い場所があることから、ここにはかつて倉庫があったと推定される。倉庫の規模は幅約20m、奥行き約9mの広さで、明治30（1897）年頃、解体されたと伝えられる。

原料の石灰石を採掘したホンマは、所久保の東側で南北に延びる稜線上にあり、南北25～30m、東西1～5mの広さで、背後には比高1～4mの岩壁が聳えている。ホンマと所久保の谷底との比高は約85mである。ホンマのほぼ中央から谷底へ向かって幅10～13m、深さ約3mの、滑り台状の「石落し」が続いている。ホンマで採掘された石灰石は、人が転がせる程度に砕かれた後、石落しを転落させたという。石落しの末端である所久保の河原には、転落した石灰岩が堆積し、ここで直径3～10cm程度の大きさに砕かれた。その後、蔓で作った背負い籠^{かづら}に入れ、あるいは明治時代になると地車^{注10}に載せ、窯まで運んだと云う。石落し末端の石打ち場から窯まで、約75mの距離である。

平次郎窯は寛文8（1668）年の『武蔵国多摩郡上成木村上下繪図』に描かれていることから、当時、石灰焼きが行われていたことが分かる。また、明治21（1888）年に作成された石灰製造場絵図や石取場絵図には、窯やホンマの状況が描かれ、その他には、明治21（1888）年の火薬買請願・借入金連借証、同22年の借入金証書、明治26（1893）年の雑木売渡シ状が残されていることから、石灰焼きは、幕府の要請で慶長11（1606）年に行われてから^{注11}、明治27（1894）年に木崎卯三郎（明治27年没）が廃業するまで続けられたと考えられる。齋藤（1878）によると、明治11（1878）年には木崎庄之助が経営し、1年間に約7万俵を生産していた。

なお、明治32（1899）年に井上五左衛門が子安神社（慈願院観音堂）へ奉納した、石灰石を採掘している状況を描写した絵馬（写真－1）^{注12}は、青梅市立郷土博物館に保存されている。



写真－1 じげんいんかんのんどうほうのうせつかいさいせきじょう ず え ま
慈願院観音堂奉納石灰採石場 図絵馬

2－2．正木沢出口に残る、武藤の窯跡と田中の窯跡

2つの窯跡は、成木川に北小曾木川が合流する落合から約350m下流で、まさきざわ正木沢峠の北側に源を発する正木沢が、成木川に合流する付近に位置する(図1)。正木沢の右岸側は武藤^{注13}の窯跡、左岸側は田中^{注14}の窯跡と伝えられる(図3)。

ホンマは窯跡から正木沢を上流へ約500m進んだ山地内に位置し、窯跡からホンマまでの流路に沿う小径には、石灰石を背負って往来する作業員が、安全に往来することができるよう、石垣が築かれている。

武藤の窯跡は、石垣の比高は3～3.5m、幅約11mで、石垣上段の平坦面の幅は西側で約5m、東側では1mに満たない、山地からの小径が窯跡に出た場所には、加熱した痕跡がない直径3～10cmの石灰石が散乱していることから、ここはホンマから運ばれて来た石灰石塊を小さく砕く、石打ち場であったと推定される。一方、石垣前の平坦面はほぼ正方形で、幅約14m、奥行き約13m、掘ると加熱した痕跡がある、直径数cmから20cm程度

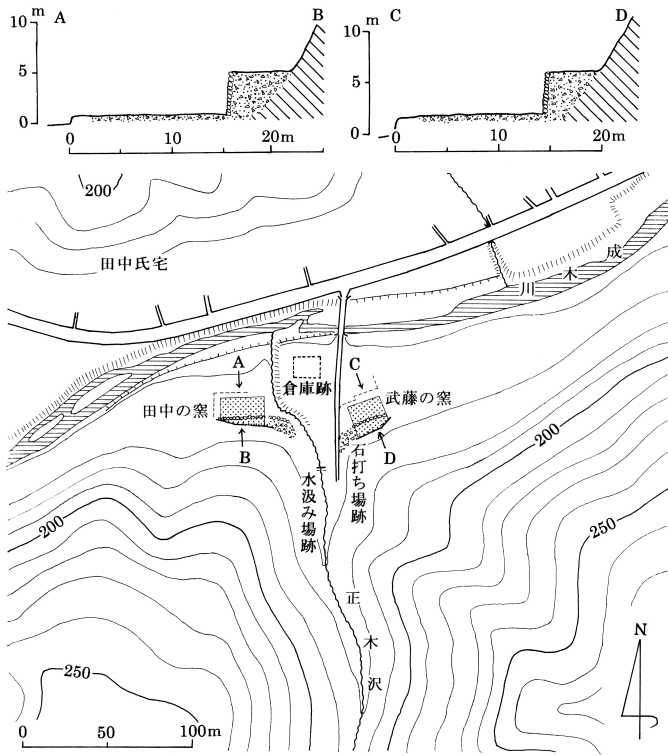


図3 正木沢の下流にある、武藤の窯跡と田中の窯跡

細線は等高線で、主曲線は10m 間隔。波線は水路。位置は図1を参照。

の石灰石が大量に出てくる。

窯で石灰焼きが始まった時期については不明であるが、寛文8（1668）年の『武蔵国多摩郡上成木村上下繪図』に描かれ、また延享4（1747）年から天保3（1832）年の間に描かれた『成木村全図』には所有者不明の窯として描かれ、さらに明治21（1888）年生まれの男性には幼少の頃、生石灰を成木川に投げて遊んだという記憶が残っていると言う。これらのことから、八子谷地区の名主であった武藤家は、江戸時代前期から明治25（1892）～28（1895）年頃まで、この窯で石灰を焼成していたと考えられる。

一方、田中の窯跡は、石垣は比高3～3.5m、幅は約25mで、石垣上段の平坦面の幅は武藤の窯より狭い。この窯にも入口付近には、石打ち場と推定される場所がある。石垣前の平坦面は長方形で、幅約10m、奥行き約14mである。この窯跡は『武蔵国多摩郡上成木村上下繪図』には描かれていないが、『成木村全図』には所有者不明の窯として描かれている。また、明治17(1884)年に組織された本山石灰会社が作成した会社設立趣意書の中に、所有者の田中傳吉の氏名があることから、武藤の窯と同様、明治25(1892)～28(1895)年頃まで石灰を焼成していたと考えられる^{注15}。

2つの窯跡の間を流れる正木沢には、大量の黒焦げになった木片や不完全燃焼の石灰石が散乱していることから、石灰の焼成で不要になった残骸を投げ捨てたのであろう。また、成木川の近くには幅約15m、奥行き約12.5mの広さで、飛散している消石灰粒が、周囲より多い場所がある。この位置に、かつて倉庫があったと推定される。田中氏宅までの距離は約80mと近いことから、約600m離れた武藤氏が所有する倉庫であったと推定される。

文政11(1828)年に野崎嘉右衛門の尽力によって吹上峠が開通するまで、上成木や北小曾木で生産された石灰は、成木川を渡り、2つの窯の間を通過して、正木沢を上流に向かい、正木沢峠を越えて黒沢の柳田へ向かうコースを経て、江戸へ向かっていたと考えられる。

2-3. 師岡氏の窯跡

直竹川に沿っては8か所に窯跡が残り、埼玉県教育委員会が文化財に指定している師岡氏^{注16}の窯跡は、その中で最も東側に位置する(図1)。ホンマは流域内に4か所に点在しているが、この窯への石灰石は、直竹川支流の正木沢の中流西側に残っているホンマから搬出されたと伝えられる。

窯跡は北方へ延びる、緩やかな傾斜をした稜線の末端を掘り崩した比高3～5m、延長約21mの野面積の石垣である(図4)。石垣の西側の部分

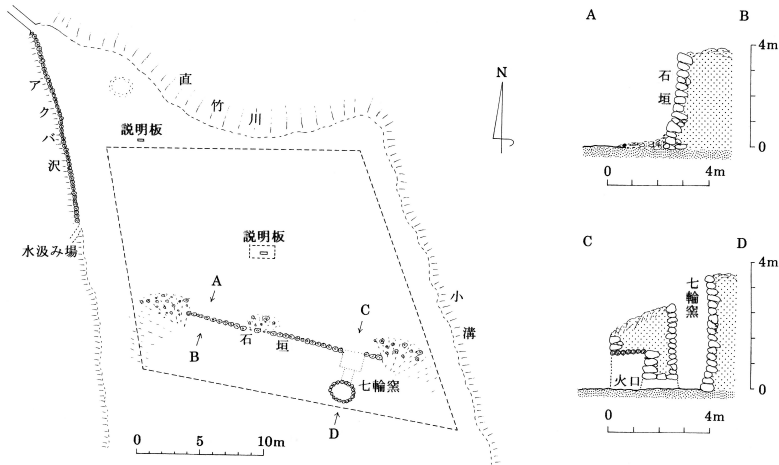


図4 直竹川下流にある師岡氏の窯跡
位置は図1を参照。

は比高約4mで、平次郎窯などと同様な方法で石灰を焼成したと考えられる。

石垣の東側は比高約4.6mで、七輪窯^{注17}となっている。七輪窯の火口は、幅約1.5m、高さ約1.4m、奥行き約1.4mの規模で、その奥は幅約52cm、高さ約30cmの空間となっており、さらに奥部は図4に示されているように、徳利状をした縦筒と繋がっている。縦筒は東西約1.28m、南北約1.13mの楕円形で、基部はそれぞれ約1mの広さである。

この窯は埼玉県教育委員会が作成した説明板にある、「慶長年間（1596～1614）に始められた」とする史料はない。東京都立大学人文学部歴史研究室成木村調査団（1959）は元禄12（1699）年の創業としている。延享4（1747）年から天保3（1832）年の間に描かれた『成木村全図』には、七左衛門の窯として描かれている。操業を終えた時期についても不明である。

七輪窯が構築された時期についての史料や伝聞はないが、七輪窯は成木川流域にはないことから、栃木県葛生地区や岐阜県赤坂などから情報を得

て、明治時代になってから構築したと推定される。かつては師岡伴次郎氏が農間稼ぎとして石灰を焼成していたが、経営が行き詰まったため、明治25(1892)年頃、村木倉之助氏に引き継がれた。村木氏も経営が行き詰まったため、明治34(1901)年に操業を終えている。

3. 石灰窯の構築と石灰石の焼成法

成木地区における本窯あるいは本山窯と称される窯は、延長10～20m、比高3～4mの野面積の石垣^{注18}、石垣上段の平坦面、石垣前の平坦面から構成されている(図5-(1))。石垣に寄りかかる状態で石垣前の平坦面に燃料を積み上げ、石垣上段の平坦面から燃料の上に原料の石灰石を積み上げ、石灰石の焼成を行った。

石灰焼きの準備は、農作業がほぼ終了した、11月上旬から始められた。江戸や八王子などの商人から注文を受けた窯主は、それまでの経験を基に、消石灰の生産高を見積り、準備に取り掛かった。作業員の人数を見積り、これまで作業に参加したことがある人たちに声を掛ける。多くは地元の人たちであったが、仕事を求めている黒沢谷や扇町屋からの人たちも、作業に加わったと伝えられる。1窯あたりの正確な人数は明らかでないが、1窯につき20人前後であったという。この中から、主として経験を基に、指図をする頭取を決め、以降は頭取が中心になって作業を進めた。

石灰焼きは覆屋がない野外に燃料を積み上げ、野焼きの方法で行なわれたため、作業は降水が少なくなった晩秋の11月上旬に始まり、菜種梅雨が始まる前、翌年2月中旬に終了した。一連の作業は具体的には、(1)原料の採掘と搬出、(2)燃料の集散、(3)石灰焼き窯の構築、(4)燃焼と石灰の生産、の工程で行われた^{注19}。